

近代プラネタリウム100周年  
& 市立博物館30周年



そらんぽ四日市  
ホームページ

今からちょうど100年前の1923年10月21日、ドイツのCarl Zeiss社で近代的な光学式プラネタリウムが誕生しました。プラネタリウムとはPlanet（惑星）+arium（空間）という意味の造語です。この機械の誕生によって、惑星の複雑な動きが再現できるようになったのです。

本市でも30年前の1993年に、初めてプラネタリウムが設置されました。当時の機械は「ヘリオス」。一つの球体で天球上の北から南まで全ての星を映すことができる「一球式」でありながら、日々の星の動きだけでなく、何千年にもわたる北極星の動きをコンピ

ュータ制御できる、世界で初めての投影機でした。現在使用している2代目は、さらに進化した「ケイロン401」。肉眼で見られる星の色も忠実に再現しています。

そんなプラネタリウム100周年、そして市立博物館30周年を記念したオリジナル番組「プラネタリウムヒストリー 地上に降りた一億四千万の星」を9月12日(火)から放映します。プラネタリウムのメモリアルイヤーを、当館で楽しんでみませんか。



☎ 博物館・プラネタリウム (TEL) 355-2700 (FAX) 355-2704

江戸時代に掘られた「和無田のマンボ」

「マンボ」という言葉を耳にしたことはありますか。マンボとは、員弁・四日市・鈴鹿を中心とする鈴鹿山麓東に分布する、素掘りの横穴式水利施設です。川の浸食で生じた「段丘崖」に隧道（トンネル）を横に掘り、トンネルの壁から染み出た地下水を集めて外に流すものです。灌漑用のほか、生活用水にも使われました。

市内では、水沢町、堂ヶ山町、鹿間町、山村町、西村町などに広く見られますが、今回は小山田地区にある「和無田のマンボ」を紹介します。

江戸時代に掘られた長さ490mのマンボで、壁には当時、掘削に使われた

ツルハシの跡が残っています。流れ出した水は和無田池に流れ込んでいます。

清らかな水をたたえる和無田池には、夏に黄色の小さな花を咲かせるスイレン科の「ヒメコウホネ」が自生しています。葉を水面に浮かせる水生の多年草で、絶滅危惧種に指定されている貴重な花です。

まだ暑さが残るこの時期、江戸時代の人々の知恵で掘られたマンボと、ヒメコウホネが自生する池を訪れてみませんか。（危険ですのでマンボの中には入らないでください）



和無田のマンボの入口

☎ 文化課 (TEL) 354-8238 (FAX) 354-4873